

患者ニーズを捉えた総義歯製作のポイントを学ぶ一冊

「総義歯づくり すいすいマスター

総義歯患者の『何ともない』を求めて ～時代は患者満足度～」を読んで

●わかりやすく、読みやすい解説

書評を書くためには、すべての頁を繰り、目を通さなければならない。専門書を手にするときの筆者の読書作法として、まず“あとがき”、そして“まえがき（本書ではPreface）”、次に目次に目を通してから、本論の興味のある部分を選択的に読んでいくようにしている。本書には“あとがき”がないが、代わりにSupplementとして「映像に残されたA.Gysiの総義歯製作」と「いればのたはごと」が配されており、これらは本当に読み応えがある。Gysiのビデオは私も過去に繰り返し見たものだが、修復治療のルーツを辿ることを忘れず、その原点をしっかり学びつつ、近代歯科医学的工夫をこらしながら日々の臨床に携わっている著者らの、自然科学者としての資質と姿勢には敬服させられる。

Supplementを読んだ後は、巻頭のGraph「患者が満足する『何ともない』：痛くなく・外れず・噛める総義歯」に目を奪われた。「修復治療とは、天井と底の計画を明確にすること」という理に合っている症例には感動させられる。粘膜組織と違和感なく調和するであろうことが読み取れる義歯床の形（印象採得の妙）と、コンタクトリボンにより印記されているセントリックでの下顎位の静的な安定も見て取れる。また、適切に付与されたアンテリアガイダンスは、生体組織の一部として機能する義歯であることを約束するものであり、その“臨床的姿”は患者がリンゴを丸かじりする様子に現れている。

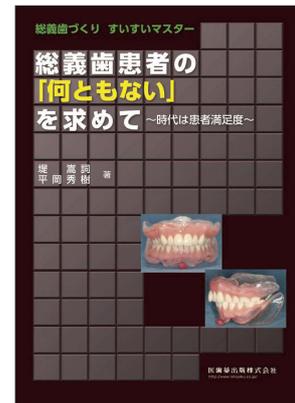
この項は筆者の読書意欲を十分に掻き立てた。筆者も、修復治療の原点は患者にその存在さえも意識させない、違和感のない修復装置にあり、それが“理想的な歯科の姿”だと考えている。

Part1「誰でもできる主訴・ニーズのラクラク把握＝わかる・みえる 診査・診断」では、思わず全編を熟読してしまった。ここでは実に詳細かつ明快に、臨床における問題点への対応策が示されている。特に「2. 分ければラクラク見えてくる患者の主訴・現症の分析→満足してもらえない…なぜ？不具合はどこにある？」と「3. 分ければラクラク見えてくる現状・問題点の診断」をしっかり読んでおくことで本書全体を理解するための道筋が立つ。

Part2「誰でもできる痛くなく・外れず・噛める『何ともない』総義歯づくり」の冒頭では、「外れようとしたときのみ吸着し、外れない義歯」のメカニズムが、イラストにより丁寧に解説されている。ここでも、続く「0. モノログ」でも、歯科医師・歯科技工士間の共通言語による「なぜ」の共有の必要性が説かれており、興味深い。

以降、1～10では、Graphで挙げられた症例について、初診からメンテナンスまでの治療過程が示されており、「1. 初診～1つ目の本義歯装着までの経過」から「4. 治療用義歯製作のための最終印象～作業用規格模型製作」では、歯科医師と歯科技工士とのやりとりなどが、経過の年月日まで記して誰にでもわかる言葉とわかりやすい写真・図表により解説されている。「5. 治療用義歯のための咬合採得」から「10. 2つ目の本義歯（最終義歯）装着～経過観察」は、本書のエッセンスとなるところであり、治療の流れに沿ってじっくり読み込みたい。

Part3「患者の情報をそのまま写す誤差のないラボワーク」は、堤氏ならではの抜かりのない緻密さに満ちている。特に冒頭では「無歯顎総義歯の成型精度を向上させる」ためにはどのような印象採得が必要かを、流れを持たせて図解しており、臨床的でわかりや



■堤 嵩詞・平岡秀樹 著

■A4判／定価：8,600円＋税

■医歯薬出版株式会社 刊

すい。「3. 規格模型の製作」と「4. 咬合床の製作」では、計算式と模式図、それに素晴らしい臨床例によって、微に入り細にわたり「基礎床の成型精度が決め手」であると説かれている。「収縮による浮き上がり量の模式図と理論計算式」（本書図Ⅲ-11）など、誰にでもわかるよう客観的に示されたこの部分は圧巻であり、堤氏の「何とかかわかってほしい！」という気持ちがひしひしと伝わってくる。使用材料の物理学的な物質特性の把握と解剖学的・生理学的な諸原理の理解によって患者のニーズに応える、その思い……筆者の最も好感の持てるところであった。

「5. 人工歯排列」では、前歯部排列については「前歯部人工歯排列における生体に対する形態・機能の調和」、臼歯部排列については「力のベクトルを考慮した臼歯部人工歯排列」など、特に128～133頁をじっくり読むべきであろう。「6. 歯肉形成」から本編の最後までに目を通してから、再び最初に戻りPrefaceに目をやる。そして再びGraph「患者が満足する『何ともない』」の3頁目（vii頁）をじっくりと見てほしい。——その数頁の中に本書のすべてが集約されていることがわかるであろう。患者の「何ともない」とはいかに重くうれしい言葉であることか……広く歯科治療の原点に立ち戻るため、多くの歯科医師・歯科技工士諸氏におすすしたい一冊である。（愛歯技工専門学校名誉校長／桑田正博）